

木村曙「勇み肌」と『江戸新聞』

白井ユカリ

はじめに

木村曙の二作目、「勇み肌」(明二二・五・二三～二九／全六回)

は、『江戸新聞』(以下『江戸』)に掲載された。

一七歳の少女作家によるこの作品は、任侠の徒を主人公とし、殺人という結末を持つ。著者の他の作品と趣を異にするそれが、『江戸』というメディアのニーズに呼応したものであることは、想像されるところである。

署名は、〈曙女史稿〉(独幹子訂)と並記され、独幹子⁽¹⁾独幹赦史⁽²⁾ 大森惟中による校訂が明示される。『江戸』創刊号(明二二・五・五)に寄せた大森の祝辞(「祭礼に寄する祝詞」)には、作品のキーワードが入れ込まれており、大森の文案をうかがわせる。掲載の経緯にも、大森の事情が関わっていた。

独幹赦史の沙漠の旅処女の災難の顛末は一旦局を結び尚引続き奇談を掲げらる、筈なりしが赦史恙ありて目下療養中なるを以て其の間を幸ひ岡本曙女史の寄稿せられし勇み肌を掲げたり：

(「新小説の御披露」『江戸』明二二・五・二六)

記事は、大森のいわば穴埋めとして「勇み肌」を掲げたとしており、ここからも、大森と大森門下生・曙との密接な関係がみてとれる。

作品告知は、前田健次郎⁽⁶⁾「香雪」の小説の登場人物の口を借りて、次のようになされた。

今日からは別嬪の作の小説が出たぜ、ナニ別嬪の作だ其奴も宜可減な拵へものだらふ、⁽⁷⁾汝さう頭から抹殺すもんぢヤアねへ読売新聞なんぞにも出た事のあるマア鳥渡貸しな、夫見ねへ読ずにヤア居られめへ：(「江戸版四民往来」『江戸』明二二・五・二二三)

『読売新聞』(以下『読売』)に掲載された、デビュー作「婦女の鑑」(明二二・一・二二)の告知が、(岡本えい子女史は高等女学校を卒業して夙に淑徳才藻の誉高く学の窓の筆ずさみに一篇の小説を綴られしと聞き弊社強て乞ふて其草稿を得今日より紙上に掲ぐる事とせり妙齡の女子にして此筆の花を咲かず我輩首を掻いて徒らに此の前駆をなすこれもまた身に取りては栄とすべし)(饗庭篁村、明二

二・一・三) という文言であったことに鑑みると、メディアのカラーが自ずと理解されよう。

本論では、『江戸』というメディアの特質や、作品モチーフを検証し、それらを踏まえて、「勇み肌」の読み解きを試みたいと考えている。

一 『江戸新聞』

『江戸』は、改進黨系の大新聞『朝野新聞』(以下『朝野』明七、二六)と対になった、小新聞『絵入朝野新聞』(以下『絵入朝野』明一六、二二)の後継紙で、社屋もスタツフも、『絵入朝野』をそのまま受け継いだものであった。『江戸』創刊号から、独立の経緯を考察してみたい。

『絵入朝野』主筆を経て、『江戸』社長となった前田香雪は、「購読者が増加したため、兼てからの希望通り独立を果たした」と説明するが(『江戸新聞之御披露』)、理由はそれだけではなかったと思われる。香雪は次のようにも記している。

江戸人の九分九厘は東京といふ別称をのみ称へて江戸といふ本名を忘れたる体なれば(中略)江戸子の成島翁江戸子のおれを助くおのれ其恩を忘れず絵入朝野新聞を江戸新聞と改題して独立する迄に進めしは私しに於て聊か尽したるものと云ふべきか…(改題の告条)

ここにみられる(成島翁)成島柳北が、『朝野』『絵入朝野』の創始者で、旧幕臣という経歴と、ジャーナリストとしての姿勢から、

(江戸子)の代表のような存在であったことはよく知られる。とはいえ、明治半ばにあえて(江戸子)というコンセプトを打ち出すには、「前提」があった。

明治二二年は、徳川家康関東入国三百年目にあたり、江戸回顧の風潮が高まっていた。八月には大々的な三百年祭が企画され、その運営は「江戸会」という組織が担ったが、旧幕臣たちによって同年四月に結成された江戸会の創立メンバーに、(前田健二郎)も名を連ねる。つまり、『江戸』社長・香雪は、二二年の江戸ブームを牽引したひとりといえた。

ブームの背景に国粹主義の台頭がある。前年創立の思想団体・政教社が標榜した国粹主義は、明治政府による極端な欧化主義政策に疑問を感じていた国民の支持を集めていた。ジャーナリストの他に、国粹主義の美術家としての顔を持つ香雪が、時流であるところの国粹、それと連動した江戸ブーム、故・成島柳北に由来する(江戸子)とを看板にして、新たに新聞を売り出そうとしたことは想像に難くない。

創刊号の「祝辞」には、東京をあえて(江戸)と呼び、(江戸会)とセットで語っているものが数多く見受けられる。(明治の世界は知識と金の大修羅場)(ケチな金づくで説を曲げたりヒケを取ても恥とせず髭に掴まる者多く)と明治の風潮を嘆く言辭、(卑怯な兵法は大嫌ひ)(任侠の風ありて強きを挫き弱きを助くる)と江戸っ子気質の復活を望む言辭が並び、(江戸粹保存江戸子万歳)のように(江戸粹)の語が頻出する。江戸粹とは(江戸固有の美風を

発揚)の意で、国粹の語の流行に伴い、人々の口の上るようになったものと思われる。

しかし、江戸回顧が徳川回帰ではないことは、以下の祝辞に象徴的である。

江戸粋を奨励して所謂江戸兒の義侠と潤達を研き(中略)大日本帝国の首都万機の中心陛下の膝元の民たるの幸福と実力と権勢とを益す發達させ永く江戸兒の名譽を伝へんことを欲するなり。(永井小石「新聞の改題を祝して江戸粋の流行を望む」)

江戸っ子が江戸粋を發揮し陛下の威信を輝かせる、という解釈は、明治の世にあつて、『江戸』を冠した新聞が必要とした、大義名分といえよう。

『江戸』創刊号は、江戸粋に損得抜きで、必要とあらば強いものに立ち向かう、またその基本は忠君愛国にあるといった、メディアとしての姿勢を表明している。それが単なる江戸趣味、懐古趣味ではないことは、モダンな(写真銅版)の挿絵を添えた、大森惟中[○]独幹散史[○]による西洋小説「沙漠の旅」を一面、江戸の茶屋風景を挿絵とする、柳香散史「江戸の花」を二面、という紙面構成からもみてとれる。

二 「勇み肌」概要

(勇みな文章、任侠な筆、粋な統物)という祝辞から、ほどなく発表された「勇み肌」のあらすじは、以下のとおりである。

いまはむかし、(加々美明)は京都に単身赴任中で、江戸屋敷で

は、娘(お輝)と、後妻でお輝には継母の(お鉄)が暮らしていた。お輝はお鉄が(密夫)に頼み、父を(害せん)としていることに気づき、いてもたってもいられない。家を出て乳母の家に身を寄せたお輝の元に、父の使者がやって来る。(忠助)と名乗るその男は、父直筆の書状をみせ、上洛の命を伝える。急ぎ立てられるように京都に向かうお輝。日暮れの嵐山で、忠助は突然変貌をみせ、お輝に身売りを迫る。聞き入れないなら殺すと刀を振り上げる忠助。覚悟を決めて念仏を唱えるお輝。お輝の危難を救ったのは、通りがかりの侍であった。何とその侍は、幼い頃他家に養子に出された、お輝の兄(辰夫)で、偶然の再会を果した兄妹は、忠助を道案内に明の館へ赴く。

兄妹そろつての訪問に驚く明は、子細を聞き、忠助を問い正そうと顔をみると、男は忠助本人ではなかった。観念した男は、「自分は(俱利伽羅文次)というあぶれ者で、ある人から頼まれて、明とお輝の命を狙っていた」と白状する。明の使いで江戸に向かった忠助を襲い、成り済ましたというのである。さあ殺せとばかりに身を投げ出す文次。明は文次の(しごき)に元結を切り落とし、(恩愛)と(義理)とを説いて聞かせる。明の真心に感じ入った文次は、江戸に戻ると、お鉄の悪事を止めようと、自首を持ちかける。悪あがきをみせるばかりのお鉄に、改心の可能性のないことを悟った文次は、加々美の家を守るため、不動明王の救済とばかりに、隠し持った出刃包丁で、お鉄の背中を斬りつけ、首をかき落とすと、その首を脇に挟み、一散に役所へ向かうのであった…。

まさに（悪に強きは善にも亦強き）を絵に描いたようなこの作品への言及は、管見のかぎりでは、未だ二人の評者によるもののみである。一方は、

全く戯作然とした作であつて、これが題材の点のみにしても、新しさのあつた「婦女の鑑」の作者の作であるとは考えられぬような愚作である。⁽¹¹⁾

といった辛辣なもの。いま一方は、

曙の本質は、義理・人情の「旧さ」に根ざしており、（中略）それは、江戸の香りを、全く捨てていない下町―浅草―に育つた曙の限界と言えるかもしれない。⁽¹²⁾

と、〈旧さ〉を曙の〈本質〉〈限界〉とするものである。

「勇み肌」に〈新しさ〉が認められないとする点で、両者は一致するが、しかしながら、「曙一派」⁽¹³⁾の高塚清花は、一派の創作的目的を、〈婦女子のために善を勧め、悪をいましめ、社会の情況に通じ、物理にさとる〉（「文かく女子、評する博士」『貴女之友』明二・四）としており、一派のほかの作品同様、「勇み肌」が、旧い外観の内側に、即時代的な要素を取り込んでいる可能性は高いと考えられる。

三 『文覚上人勸進帳』

大森と曙の著作に、演芸の改良を目的として、明治二一年に設立された「日本演芸矯風会」（以下「矯風会」）演習会の演目を取り込まれていることについては、別に述べた。⁽¹⁴⁾ 歌舞伎通であつた大森は、

改良歌舞伎をモチーフとした創作が、庶民を啓蒙するうえで有効と判断し、門下生・曙にもその方法を伝授したものと思われる。

「勇み肌」は、第三回演習会（明二一・六・二一―二二、中村座）の演目を念頭に執筆されたとみなせる。

実際に演習会で上演されたのは、竹柴其水『那智瀧祈誓文覚』⁽¹⁵⁾（以下「那智」）であるが、六月に入つて「那智」の筋書が新聞紙上で公開されるまで、演目は、依田学海・川尻宝岑共著『文覚上人勸進帳』（以下「文覚」）と喧伝されていた。

演劇改良、演芸改良と続く運動において、局外の有識者の参加を求める思潮があり、その延長線上に、史実重視の歌舞伎脚本『文覚』が「読み物」として出版された（明二一・九、金港堂）。ゆえに『文覚』が、演習会の演目とされることは、自然な流れといえた。変更の経緯については割愛するが、「勇み肌」執筆時、『那智』の内容は知り得ず、したがつてモチーフは、既刊の『文覚』ということになる。

『文覚』のあらずしは、次のようなものである。

人妻（袈裟）に横恋慕した（遠藤盛遠）は、袈裟の夫（渡辺渡）を殺そうとして、誤つて袈裟の首を斬り落としてしまふ。盛遠は袈裟の首を掲げて渡のもとを訪れ、自分の首を刎ねるよう申し出るが、渡は盛遠を許す。渡の心を感じ入つた盛遠は、（髻）を切つて出家し、（文覚）となる。文覚は大願を立てて、紀伊国・那智山で命がけの荒行を続け、途中落命しそうになるも、（不動明王）らの加護によつてこれを救われる。伊豆国・伊豆山で頼朝と面会した文覚は、

天下を取った暁には、神護寺を建立してほしいと勸進をするのであった…。

「勇み肌」と『文鏡』とを比較すると、〈文次〉は〈文鏡〉の掛詞となっており、いずれも命を狙った相手Ⅱ(明)〈渡〉から許され、〈しごき〉(髻)を切つて改心するのと同じ結構である。また、お鉄が〈後袈裟〉で斬られ、〈首〉を落とされるといふ殺害方法は、〈袈裟〉の名と、その殺され方に相関し、文次がお鉄の首を小脇に抱えて役所に出頭するという描写は、盛遠が袈裟の首を提げて渡の屋敷を訪れるという型の転写といえる。

これらの類似から、踏襲は明白といえるが、しかし、あえて渡の身代りとなつた袈裟を「貞女の極」とすれば、お鉄は「悪女の極」(袈裟の反対Ⅱ(後袈裟))であり、そのため両作品は、全体の印象を大きく異にしている。さらにいえば、文次が〈不動〉の化身となることと、文鏡が〈不動〉に救われることは、似て非なる趣向といえよう。

不動明王の化身が、悪女に天誅を加えるという筋立に、出所はあるのであるうか。

四 「祝ひの日」

「勇み肌」の約三ヵ月前、香雪は、『江戸』の前身『絵入朝野』に、「祝ひの日」(明二二・二・一九)三・六)を連載する。憲法発布当日(明二二・二・二一)、文部大臣・森有礼が、凶徒・西野文太郎に刺され、翌日亡くなるという事件を題材にしたもので、三月六日

分(第一四回目)を掲載したところで、その内容が〈治安に妨害あるもの〉(『絵入朝野』明二二・三・二一)と認められ、翌七日より発行停止が命じられ(二週間後解停)、未完のまま打切りとなつた曰くつきの作品である。

梗概を以下に示す。

時は憲法発布の頃。東京・新橋の〈森田屋〉は、〈三木田の後家〉(お三木)の経営する〈芸妓屋〉で、美人芸妓(お祐)の人氣もあり、評判となつていた。お三木は、お祐に執心の客(加治木)に、調子のいいことをいい、金を注ぎ込ませていたが、金を使い果たすとみるや、態度を一変し、追い出してしまふ。ある日、かつてお三木が懇意にしていた外国人が、森田屋を訪ねて来る。この外国人が〈延喜棚〉や〈神棚〉を見咎め、〈斯いふものを拝みますなら私し最う構ひません〉と腹を立てたことから、お三木は〈金の蔓〉である彼の機嫌を取るため、〈袖も七五三縄も取て棄て伊勢大神宮のお祓箱を取るより早くうち毀して投出したる暴行〉に出る。ある時、例の外国人の提案で、森田屋の面々は仮装をして写真を撮ることになり、お三木は〈大礼服〉を着込んで男装する。そこへ乗り込んで来た加治木は、隠し持つた〈出刃庖丁〉で、お三木の〈肋〉を二度三度と突き刺し、駆けつけた下僕(駄々重)は、〈杖〉に仕込んだ細身の刃で、加治木の〈背〉を斬りつけ、〈首筋〉を一文字に切り離すのであった…。

作品には、森が式典に参加するため、「大礼服」を着て自宅を出ようとした時、強引に押し入つて来た西野に、「出刃包丁」で「脇

腹」を刺され、そこへ駆けつけた属官「座田重秀」が、「仕込杖」で西野の「背中」を斬りつけ、「首」を切断した、という事実があるからさまに取り込まれている。

物語の背景では、〈石野とやらいふ乱暴者が大臣様を斬た〉という号外が配られ、森刺殺事件と重ねる意図を隠さない。犯人〈石野紋太郎〉について、縁故の人々の口を借りて、〈敬神家〉〈非常に学問に熱心〉〈官途の末に身を置くのも学資を得やうとの志〉といった人物像が語られ、それはすなわち、作者の西野評といえる。

一方、お三木の亡夫・三木田に対する、〈維新前に洋行して久しく海外にありしゆゑ文明国の風にふれて一も二も彼国の習慣をのみよき事と思ひ込めば〉〈古格旧様といへば何でも構はず打毀さうとの氣組なりしかば争ひ論ずる人もありし〉といった説明からは、作者の森評がみてとれる。

お三木に森が仮託されていることはいうまでもなく、何よりも、神棚を毀して投げ捨てたという行為に、西野の凶行の動機とされた、森が伊勢神宮を参拝した際の不敬な振舞いが投影されており、これが作品の眼目といえる。

五 「祝ひの日」の波紋

香雪のスタンスが、特別なものでなかったことは、以下の記事からもうかがわれる。

其の残酷なる落命を為されたることに付て慷慨するもの意外に少なうして刺客西野に就て嘖々するもの、存外に多きは驚ろく

べきことにあらずや…（「森有礼君の為に泣けよ」『女学雜誌』明二二・三・一二）

事件への反応は一樣ではなかったが、少なくとも庶民の側は、身を捨てて森の暴走を止めたとして、西野を英雄視する傾向にあった。たとえば『読売』は、西野が小中学校は首席であったことや、谷中の西野の墓地に参拝者が絶えないことなどを連日報じた。そういった風潮のなか、『朝野』は、客観的な立場を堅持していた、にもかかわらず、『絵入朝野』と同じ三月七日付で発行停止処分を受けるのである（一週間後解停）。処分の対象と目されたのは、前日に掲載された漢詩及びその評で、たしかにその内容は、森の不敬を非難し、西野の行為を〈殺身成名〉〈天誅〉とするものであったが、それでも停止は厳し過ぎる処分といえた。解停後、『朝野』は以下の恨みごとを述べている。

我社は西野の兇行に就きて報道せし事項は他社に比して頗る冷淡に且つ寡少なりし（中略）一の詩を掲載し為めに一週間停止の厳命を蒙りたりとは我社は転た遺憾の至りに堪へざるなり…（「停止の理由」明二二・三・一四）

『朝野』が、『絵入朝野』の親新聞として、連帯責任を問われたことは明らかといえよう。

そしてこの一件によって、『朝野』には巻き添えを食ったとの思い、『絵入朝野』には成島精神を失った『朝野』への失望が生まれ、それが『江戸』発刊を後押ししたとみられることは、不自然とはいえないであろう。もしもそうであれば、『絵入朝野』の後継紙『江戸』

には、香雪に共鳴するメンバーが集つたはずであり、伝統美術・工芸の保護活動における、長年の盟友・大森もまた、香雪の心意気に感じたひとりであつたらうと思われるのである。

その大森による文案が推測される「勇み肌」は、『文覚』同様、「祝ひの日」(＝森事件)の踏襲をみてとることができる。

悪女を成敗する〈文次〉の名に、「西野文太郎」が、また、文次に殺される〈お鉄〉の名に、慶応元年にイギリスに密航した際の森の変名「沢井鉄馬」が掛けられていると読むことは可能であろう。

〈加々々美明〉の名は、大森の祝辞の一節、〈日枝の大神の鏡にかけて明かなり〉に呼応すると思われるが、では、この赤坂・日枝神社の鏡が寓するものとは何か。ここで思い出されるのは、森の不敬事件＝明治二〇年、伊勢神宮を参拝した森が、内宮拝殿の御簾の内部に侵入しようとして、神官に押し止められたという顛末である。御簾内部には、皇位の標識である三種の神器のひとつ、「鏡」が奉斎されていることから、鏡への不敬＝皇位への不敬とみなされ、国民とくには国粹主義者たちの反発を招いた。伊勢神社の鏡＝日本、国粹の象徴とすれば、江戸城の鎮守という位置づけにあつた日枝神社の鏡＝江戸、江戸粋の象徴であり、それが、加々々美明の名の寓意と読み替えられよう。

したがって、悪女〈お鉄〉が、〈加々々美明〉を〈害せん〉とし、〈文次〉に阻止されるという構図は、「祝ひの日」の悪女〈お三木〉が、〈神棚〉を遺棄し、〈加治木〉に報復されるという構図に重なり、いずれも、「森」が、「国粹」を冒瀆し、「西野文太郎」によって天

誅が加えられたという解釈を下敷きにしていると思われる。ラストでお鉄は、背中を斬られ、首を落とされるのであるが、これは、「祝ひの日」の加治木、森事件の西野の殺され方の方の反転とみなせる。西野に同情的な世論のなかにあつても、「祝ひの日」は最も過激な森批判の小説といえた²³。その存在は、「朝野」と「絵入朝野」の関係を変えてしまい、また一方で、時局的に韜晦の度合いを強めたとはいえ、「祝ひの日」を支持して反体制の要素を内包する、小説「勇み肌」へつながつたと考えられる。

六 「勇み肌」

①モチーフを起点とする読み

歌舞伎脚本において、観客に共通の知識となつていく複数の世界の混合に、新しく案出した趣向を加えるという創作方法は一般的といえた。大森を中心とする曙一派は、その方法を踏襲していたと思われる。

『文覚』を起点とすることで可能となる読みがある。

『江戸』は、『文覚』について以下のように記す。

中村座は文覚上人勸進帳ときまり困洲が依田先生に万事御相談をしてするとの事ゆゑ余程高尚な狂言になるであらふとの評判

…〔劇場彙報〕明二一・五・一一

『文覚』は、元々中村座の六月興行(二三日)としての上演が予定され、演習会はそれに便乗する形で組み込まれた。記事からは〈依田先生〉＝依田学海の『文覚』が〈高尚な狂言〉というイメージ

を持たれ、〈団洲〉に九世・市川團十郎の出演が認知されていたことが理解される。

『文覚』における、〈不動明王〉（こんがらどうじ）（こんがらどうじ）（せいいたかどうじ）の渡り台詞を挙げてみる。

不動 吾れ威音王仏の化身として。斯る降魔の形を顕し。（中略）

矜 衆生無尽の罪惡を。大智の火炎に焼尽し。煩惱三毒の迷心は。

制 三味の繩にこれを縛し。生死無明の根本を。智劍を以て切り払ひ。

これに対して、「勇み肌」での文次の台詞は次のようなものである。

己も名題の俱利伽羅文次背中に彫た不動の利劍、兒がきの時から今こん糺がらの喧嘩が好きで段々と勢多伽童子せいたかどうじの纏まと持とんなあほりを喫くらつても火焰を背負て動かねば……

「勇み肌」の趣向は、文京区音羽に程近い〈目白不動〉傍での文次の啖呵、〈研いた身体の姿に写す仕打も音羽屋の綺麗爽然さびげ此方から名乗て出るが男の顔だ……〉からうかがわれよう。ここにみられる〈音羽屋〉は、五世・尾上菊五郎を指し、世話物の名手・菊五郎の屋号の入れ込みからは、団十郎演じる時代物『文覚』から、菊五郎をイメージした世話物『文覚』への変更の意図がみてとれる。つまり、『文覚』の世界を、庶民の世界に移したものが、「勇み肌」と解釈でき、『文覚』のテーマを、一般向きに書き直す趣意が、作者

にあったものと思われる。

では、「祝ひの日」「森事件」を起点とすると、どういった読みが可能となるのか。

先に、〈加々美明〉の名に、日枝神社の鏡に江戸の象徴を寓すると考察した。お鉄が、先妻の死去に伴い、後妻に入ったという設定であるのは、操26（先妻・操）を失った、日本の中枢（江戸に加々美家）が、森（後妻・お鉄）に代表されるところの無節操な思想に毒されていることの寓喩と読めよう。同様に、加々美明の京都移住は、江戸から江戸粋が失われたことの表象とみなせる。

したがって、作品は、〈加々美明〉に江戸の象徴を守るために、〈俱利伽羅文次〉に不動明王27の利劍が、〈お鉄〉に魔を断ち、〈勇み肌〉に江戸粋がよみがえった、との読解が可能といえ、それは、森事件によって日本があるべき姿に立ち返った、という作者の所感を伝えている。

だとすれば、文次が一時はお鉄の手先であったことは、何を意味するのか。「祝ひの日」でも、加治木は当初お三木の甘言を信じ、いわれるがままとなっていた。加治木や文次には、国粋、江戸粋を捨て、西洋を盲信した、「明治の大衆」が二重に仮託されていると考えられる。文次の改心は、大衆の覚醒への期待と読むことができよう。

「勇み肌」の独自性は、「国粋」から「江戸粋」への変更といえるが、日枝神社が維新後は皇城の鎮守となったように、もとより国粋と江戸粋とは不可分のものであり、変更は「江戸」という媒体に即

したものといつてよい。

②「曙一派」の世界

果してこういつた踏襲が、読者に認識されたのかを考えた時、「祝ひの日」「森事件」の踏襲は、時局的にあからさまにできないとはいえず、「栗屋落ち」の観が否めない。

一方、新聞等での前宣伝もあり、中村座六月興行「文覚」で、團十郎が主役の文覚とお家芸の不動、一人二役を演じることは、巷に浸透していた。改心後の文次の姿が不動と重ねられ、殺した女の首を手に出頭するといった印象的な描写から、「勇み肌」における「文覚」の踏襲は、読者に認識されたとしてよいであろう。

そうであれば、「文覚の発心物語」と対の関係にある「袈裟の貞操物語」は、読者の期待するところで、それを、袈裟Ⅱ夫の身代りとなつて死ぬ女から、お鉄Ⅱ夫の命を狙い天誅を加えられる女へ変更したとすれば、あえて読者の期待を裏切る理由があるのではないか。

榊原千鶴によると、この時代、「袈裟御前」は「静御前」とともに、特別な位置づけにあり、近代の「女訓書」というジャンルにおいて、袈裟物語はなくてはならないものであったという。⁽²⁹⁾

明治二〇年「袈裟御前貞操譚」（小枝繁、共隆社）、二四年「鳥羽の恋塚―袈裟御前の事蹟」（家庭教育歴史読本）小中村義象・落合直文、博文館）がその一例で、「袈裟御前」は、〈女新聞社〉が催す懸賞俳句の「お題」にまでなるほどであった。⁽³⁰⁾

榊原は袈裟を、〈盛遠の手にかかることで、己の所有権が夫の手

にあることを証する〉表象とし、こういった袈裟を称揚する傾向について、〈近代にあつて、こうした軍記物語に関わる女性像が、戦う男とそれを支える女のあり方を示すものとして利用され続けたことは、日清戦争に始まる軍国主義への道程とともに理解されるべき〉と分析する。⁽³¹⁾

にもかかわらず、「勇み肌」では、袈裟的女性を作中に描かなかつた。なぜか。

大森、曙、清花といった「曙一派」が、女性主義、啓蒙主義をその文学の指針としたことは、別に論じた。⁽³²⁾一派の作品において、儒教的な女性像を啓蒙することはあつても、自覚的に男性の犠牲となる女性が描かれることはありえない。つまり、女性主義の立場から、一派にとつて、袈裟的女性は否定の対象であり、そういった時代に反逆する要素を、作品は内包していると考えられるのである。

作品には、お輝が文次に、〈親御Ⅱ父親の〈難義を救ふ〉ために身を売れと脅され、〈たとへ何と云やつても妾や身を売る事は肯ひませぬ〉（何にも云はぬ殺しや殺しや）と、恐れる気色もなく覚悟を決める様子が描かれる。袈裟は、貞女・お輝に投影されているという見方もできようが、お輝の覚悟は、我が身の誇り、名譽のためであつて、特定の男性の所有権を証するための捨身ではない。さらにいえば、お鉄が命を落とすのも、自業自得であつて、少なくとも男性のための落命でないことは確認されるべきであろう。

③ふたつの世界

ここまで、便宜上、文次を主人公として論じてきたが、正確には、

前半（第一回〜第四回）の主人公はお輝といえ、文次は後半（第五回〜第六回）の主人公とみなすべきであろう。

この作品は、全体を通して、文体も様式も歌舞伎的であり、それは、曙文学に特徴的なものといえるが、第五回の途中、忠助を騙っていた文次が正体を現して以降は、作品の肌合いが一変する。

どうで死なざアならねへ身なら（中略）彼お鉄めを打離し公儀にお手数懸ねへ中自分の遺恨で殺したと名乗つて出りやあの家に難儀のかかる事はねい：

文次はお鉄を（お前の様な婆さんは否に成つたから打棄るのよ）と挑発し、前掲の（己も名題の俱利伽羅文次：）の啖呵へと続いていくのであるが、これを曙の文体とするべきであろうか。

前作「婦女の鑑」では、中心人物はもとより、敵役や外国人の台詞にも、等しく七五調の文語体、歌舞伎の時代物風文体が使用された。前半の文体は、「婦女の鑑」より平易であるものの、「婦女の鑑」に準ずるといえる。一方、後半の文体は、侠客の義理人情を扱う内容にふさわしく、歌舞伎のなかでも、生世話物に近く、それは曙の文体よりも、たとえば、「通俗教育 夜席演芸」（「貴女之友」明二二・一〜七）にみられる、大森の文体と近似する。

「勇み肌」は、前半は曙、後半は大森主導で書かれたとしてよいであろう。

前半は、曙文学の特徴が各所に認められる。

加々美家は父の不在で、お鉄が戸主代理として君臨している。元は奉公人であったのを、先妻の（御遺言）で後妻に取り立てられた

お鉄は、情夫や下男を意のままに操り、お輝にも下僕（良作）がが仕えている。そこからは、先妻が後妻を指名し、後妻と娘に男達が仕えるという、女性上位の家のあり方がみてとれる。また、加々美家の長男が、生まれてまもなく他家に養子に出されたという設定は、（当時においてはあり得ないこと）と疑問視されるものの、入り婿、娘の家督相続という形態は、曙作品の定型といえ、長男の養子縁組は、この定型維持のための処置とみなせる。さらに、お鉄の魔の手から逃れて、お輝が身を寄せる先が、乳母の家で、二人が深い心情的結びつきを有する間柄であることも、やはり曙作品に必須の、女性の連帯の表現といえよう。

ところで、横恋慕を企らみ病死する「婦女の鑑」の（花子）は、（悪にもせよそれ迄に思慮深ければ、女子として中々益ある人）と評されたが、大悪・お鉄の評価はどうか。憎々しさのみが強調される後半に比して、口達者、したたか、手練手管：と多面的に造形される前半のお鉄像は、奸智に長けた印象が強く、毒婦に通じる魅力をみることもできよう。曙作品において、男女間の禁忌を犯した女性への厳罰は一貫するが、同時に、死をもつて購う女性を全否定しないという点も共通している。袈裟は否定、しかし（後袈裟）お鉄は全否定でないとしたならば、前半のお鉄の描かれ方も、曙の女性主義の一環と捉えるべきなのかもしれない。

これに対し、後半は、文次に焦点化される。

（あふれ者）文次の「改心」を強調しているのは、「文覚」の踏襲といえる。文次はもともと「悪」の代償として死ぬ覚悟はあったも

の、明によって初めて「善」の縁を持ち、命をかける対象がお鉄から明に変わる。殺人の動機を「恨み」とする「祝ひの日」と比較すると、より教訓的といえよう。後半は、〈罪を悪んで…〉（人の性は本善³⁹）等の台詞が散見され、人々の「蒙を醒ます」ために筆を執るとする大森に、教導への強い思いがあったことが想像される。

先述の、『文覚』の世界を庶民の世界に移す意図は、後半に集中してみられ、お鉄殺害を不動明王の救済として描くなど、「森事件」へのスタンスも後半により明確といえる。そのことは、モチーフが大森由来であること、さらには、曙が自らのスタイルを保持しながらも、梓組みとしては、大森由来のモチーフを取り入れていることの裏づけとなり得る。

作品は、ふたつの世界を通じて、危機的状況にあって命乞いをしない、良作⁴⁰、お輝、文次と、命乞いをするお鉄を対照的に描き、命を惜しまない〈勇み肌〉を称揚している。これを主題とみなしてよいであろう。

このうち、良作は、追い継る女への〈私情〉を断ち切って、〈主〉明への〈思ひ〉を優先し、また文次は、明から〈恩愛〉を説かれ、孝に目覚めるが、それでも、明への〈御恩がへし〉を優先する。

では、〈加々美明〉という象徴的人物のために、私欲、私情を捨て、「忠」を貫く人間を称揚する、「勇み肌」に仮託されているものとは何か。

ひとつには、保身の優先を恥となくなった明治人に、身を捨てて主義主張を貫く心意気を啓蒙する意図があったものと思われる。

加えて、皇道のために一命を投げ出した西野を下敷きとして、忠君思想啓蒙⁴¹の目的を読むことも可能であろう。

おわりに

「森事件」および、事件をモチーフとした「祝ひの日」は、西洋主義から国粹主義への、時代の変換を如実に伝える。

殺人犯に拍手喝采する国民の姿は、仇討ちが合法であった近世と明治が、隣り合わせであるという事実を、改めて認識させると同時に、『江戸』創刊号の祝辞にみられる、〈明治の世界は知識と金の大修羅場〉（ケチな金づくで説を曲げたりヒケを取っても恥とせず髭に掴まる者多く）といった風潮への不満が、限界に達していたことを知らしめる。犯人・西野を肯定した香雪、その香雪に共鳴した大森が、ことさらに旧弊な考えの持ち主というわけではなく、当時としては、バランス感覚を有する知識人であったことは確認されるべきであろう⁴²。

国粹主義の隆盛、江戸ブームの到来、森事件という、明治二二年ならではの要素が重なって生まれた、『江戸』の末路はどのようなものであったのか。

森事件は、同年四月の東京高等女学校醜聞事件へとつながり、森の教育改革の実行者として東京高女に赴任した、校長・矢田部良吉、教頭・能勢栄を標的としたこのスキャンダルによって、六月には森の残党までも駆逐される。『江戸』もすぐさま、連載小説に醜聞事件を取り込み、気骨をみせるが、『江戸』の勢いは、八月の三百年

祭の頃をピークに、衰えをみせ始める。一〇月に院本小説を得意とする右田寅彦⁽¹³⁾、一二月に劇通で知られる幸堂得知⁽¹⁴⁾を招聘し、芝居および芝居口調といった表現へのこだわりをみせるものの、それはある日、「時代遅れ」との烙印を押されることになる。

明治二三年一月、犬養毅、尾崎行雄らは、『朝野』の紙面改良に着手し、二月には、従属関係を解消したはずの『江戸』にまで乗り込んで来る⁽¹⁵⁾。

昔日の陋夢^{ろうむ}を破る能はずして、徒らに駄洒落を鬧はし、楽屋落ちを競ふて、文は猥陋^{わうろう}なるを厭はず、記事は淫褻なるを嫌はず
：（船庵居士「江戸新聞記者に寄す」『江戸』明二三・二・一五）

『江戸』紙上で、『江戸』記者たちへの苦情が延々と述べられるという状況は、実質的な『江戸』の終焉を意味しているといつてよい。東京高女が廃校となって三ヵ月後の二三年六月、尾崎らの改革の効果なく、『江戸』は買収され、『東京新聞』⁽¹⁷⁾に姿を変え、政党系新聞の使命が曖昧となり、無政党化、中新聞化の波に飲まれていった結果といえようが、同時に、『江戸』の存在価値は、対立項「西洋主義」あつてのものだったとも言える。

しかし、そうであったとしても、「勇み肌」が、演芸改良運動のさなかで森事件の直後という「時間」、先駆的でありながら保守的という曙一派の「思想」のみならず、『江戸』という「場」が交差してこそ、現出した作品であることはまちがいない。

注1 作中の〈勇み肌〉〈加々美明〉〈俱利伽羅文次〉は、祝辞の〈大勇み〉

〈鏡にかけて明かなり〉（俱利伽羅文）に呼応する。

2 曙の三作目「曙染梅新型」（『貴女之友』明治二三年六月／九月）のモチーフ、歌舞伎「鞘当」は、大森から与えられたものとみなせる（拙稿「木村曙と独幹放史」（『日本近代文学』平成一八年五月）。大森は「虎乃巻」（『読売』明治二三年一月）冒頭で、曙を文楽の人形、自らを（黒坊）人形遣いに喩えている。

3 アラビヤを舞台とした翻訳西洋小説で、『絵入朝野』から『江戸』へ引き継がれ、明治二三年一月から八月まで掲載された。

4 曙の母方の姓。妾腹の子であった曙は、作品当時、岡本姓を名乗っていた。

5 拙稿「木村曙と独幹放史」（『日本近代文学』平成一八年五月）。天保二二年／大正五年。国学者・夏蔭の子。旧幕臣。新聞記者。小説家。美術家。明治八年『平仮名絵入』入社。一七年成島柳北に請われて

『朝野』に転じ、「絵入朝野」の顔となる。一方、一三年前後から、龍池会（後の日本美術協会、東京彫工会等の役員として、伝統美術・工芸の振興に尽力し、美術界に貢献した）。

7 （徳川家三百年間の事跡を考究して其の益を享け延きて一般及び後世にも及ぼすことを目的とした（『江戸会誌の首に』『江戸会誌』明治二二年八月、博文館）。

8 「江戸会発企及同意者」（『江戸会雑誌』明治二二年七月、江戸会事務所）ほかに「粟本鋤雲」（高瀬真卿）等。

9 安政二二年／大正一一年。本名永井碌。小石は俳号。旧幕臣。中村正直の門に入り英漢学を修めたのち、『読売』『新潟日々』『今日』『朝野』等の新聞で記者として活躍。明治二三年に体調を崩して以降は俳道に専心する。著書に『変哲学』（明治二二年、成文堂）ほか（『小石遺稿』大正二二年、私家版）。

10 不動明王は、教化し難い衆生を救うために忿怒の姿で現われ、従わぬものは無理遣りにでも導き、救済する役目を持つとされる。俱利伽羅不動はその変化身。

- 11 和田繁二郎『明治前期女流作品論』（平成元年、桜楓社）。
- 12 長江曜子「木村曙『勇み肌』について」（『文学研究』昭和六一年二月）。
- 13 拙稿「曙一派」の提言」（『実践國文學』平成二二年一〇月）。
- 14 注5に同じ。
- 15 歌舞伎脚本、「秀郷勲功記」明治二四年、鈴鹿堂）の著書があり、そのまえがきには、「堀越洲氏も一覽の上至極面白しとの事」（本年中東京大劇場にて興行可相成候」といった記述がみられる。
- 16 依田学海自身、六月一八、一九日頃、「都新聞」附録の小冊子「中村座戯場筋書」で、初めて「那智」の存在を知ったと記している（『文壇上人勸進状脚本著作始末記』『読売』明治二二年七月三日）。
- 17 西野は、森の不敬行為の真相を確かめるため伊勢に赴き、その上で暗殺を決意したとする遺書を残している（森本貞子『秋霖譜』平成一五年、東京書籍）。
- 18 「西野の能力」（『読売』明治二二年二月一六日）。
- 19 「淑女の手向」（『読売』明治二二年二月二日）。
- 20 「緒余漫吟」欄における「庖丁飛舞」「聶政勇敢」の二詩。
- 21 発行停止期間からも、『絵入朝野』を「主犯」としていることは明らかである。
- 22 「江戸」創刊号の祝辞には、「是れから朝野新聞と縁を切つて独立独立の一新聞（我が身体は小なるも（中略）首領の為に言論を制せられ、主義を左右される首領次第のものとは違ふ）」といった内容がみられる。
- 23 事件直後は、犯人の名を（西野次郎」と報じていた（『絵入朝野』明治二二年二月二日、一三日）。
- 24 前掲「改題の告条」での香雪の文言、「江戸子の成島翁江戸子のおれを助くおのれ其恩を忘れず」には、反体制の象徴、成島精神の後継者としての自覚が込められているのかもしれない。
- 25 当時大森は、市川団十郎、尾上菊五郎、双方と交流があった（『団洲と梅幸』『美術園』明治二二年六月）。
- 26 曙作品では、「操」に「義理」と同じ意味合いを持たせるという特徴がある（拙稿「大陸への視線」『成蹊國文』平成二二年三月）。
- 27 作品に登場する（目白不動）は「新長谷寺の不動明王像は、徳川家光が江戸鎮護のため選定した不動のひとつとされ、不動が江戸を鎮護するという作品の筋に通じる。なお、新長谷寺は戦災に遇い、不動像は現在、豊島区・金乗寺に祀られる。
- 28 初代・団十郎が成田山新勝寺の不動明王に帰依して、『成田不動明王山』を上演して以来、代々の団十郎は不動明王の芝居をお家芸とした。
- 29 「女子の悲哀に沈めるが如く」（『少女少年のポリテイクス』平成二二年、青弓社）。
- 30 「懸賞発句」（『読売』明治二二年八月二二日）。
- 31 注29に同じ。
- 32 注13に同じ。
- 33 たとえば、『曙染梅新型』のダブルヒロインのうち、お静の父は死去、雪枝の父は別居という設定である。
- 34 清花「娘気」（『読売』明治二三年一月）においても、前妻が後妻を指名する。
- 35 注11に同じ。
- 36 たとえば、『婦女の鑑』のヒロイン秀子の義姉・國子は婿養子を迎え、秀子は生家再興のために家督を相続する。
- 37 拙稿「東京高等女学校の同窓生にみるシスターフッド」（『日本近代文学』平成二〇年五月）。
- 38 たとえば、婚約者のいる男性に告白をし、水死という運命をたどる、「わか松」の（お鳥）に対しても、厳罰と擁護の両面がみられる（拙稿「大陸への視線」『成蹊國文』平成二二年三月）。
- 39 「檢谷君賜一詩却呈」（『美術園』明治二二年八月）。
- 40 お鉄は、家出したお輝の居所を聞き出そうと、お輝の側近（良作）を詰問し、拷問にかける。
- 41 忠のために命を賭す臣民の啓蒙は、徴兵制度、その先にある帝国主義へとつながる可能性を持つ。では、曙一派は、帝国主義を肯定していたのであろうか。一派の基層に、忠君愛國思想があったことはまちがいないとしても（注5に同じ）、大森「虎乃巻」（『読売』明治二三年一月）では、非戦思想が主張され、それは、当時の風潮に一線を画すものといえ

た（拙稿「大陸への視線」『成蹊國文』平成二年三月）。また、一派のメンバー・松本英子は、明治後半に渡米し、ジャーナリストとして非戦を訴えながら、生涯熱烈な皇室崇拜者であり続けたという（府馬清『松本英子の生涯』昭和五十六年、昭和図書出版）。一派は、忠君愛国思想を持ちながら、同時に、帝国主義を否定する立場にあったとしてよいと思われる。

42 一口に国粹主義の美術家と評される香雪と大森であるが、雑誌『美術園』（明治二一〜二三年、天秀社）の一連の記事からは、彼らが柔軟な折衷主義の持ち主であったことが知れる。西野の肯定は、その狂信的な思想に拠るのではなく、西野が身を捨てて主義主張を貫いた、心意気、勇み肌に拠るとみるべきであろう。

43 「社告」（明治二年一〇月二四日）。

44 「社告」（明治二年二月二七日）。

45 二月一五日号に、『江戸』の新幹部、犬養、尾崎、町田忠治、吉田熹六が、これまでの『江戸』の編集方針を否定する記事を載せる。なお（韜庵居士）は吉田の号。

46 介入に対する香雪の意見は一切掲載されなればかりか、以後、『江戸』から香雪の気配が消える。この時期『朝野』は、第三回内国勸業博覧会（明治三年四〜七月）関係の記事に力を入れ、香雪は古巣に戻りこれに従事した（美術館縦覧漫評）明治三年四〜六月）。

47 社長・大岡育造は山口県出身の政治家、教育家。

付記 引用は、原則として原典に拠り、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜取捨し、筆者の判断で太字を施した。

（しらい・ゆかり 大学院博士後期課程在学）